

第1回横浜市新たな劇場整備検討委員会基本計画・管理運営検討合同部会 (第5回 基本計画検討部会・管理運営検討部会)	
日時	令和2年10月26日(月)14:00~16:10
開催場所	神奈川県中小企業センター 14階多目的ホール
出席者 (敬称略) (10名)	<p>【基本計画検討部会委員】</p> <p>本杉 省三 委員(劇場計画研究者(日本大学名誉教授)) 明石 達生 委員(東京都市大学都市生活学部教授) 倉田 直道 委員(工学院大学名誉教授) 立川 好治 委員(有限会社ニケステージワークス 代表取締役) 水野谷 良子 委員(株式会社ヴォートル 代表取締役)</p> <p>【管理運営検討部会委員】</p> <p>高橋 進部会長(株式会社日本総合研究所チェアマン・エメリタス) 天沼 ひかる委員(横須賀芸術劇場 副館長 公益財団法人横須賀芸術文化財団 業務部長) 内田 裕子委員(経済ジャーナリスト、ハーベイロード・ジャパン副代表) 藤野 一夫委員(神戸大学大学院国際文化学研究科教授) 山中 隆委員(滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長)</p>
欠席者 (敬称略) (0名)	なし
開催形態	公開(傍聴人5名/報道14社)
議事	(1)事業化に向けた検討 (2)その他
資料	議事次第 資料1 :委員名簿 資料2 :席次表 資料3-1:令和2年度第1回横浜市新たな劇場整備検討委員会 基本計画・管理運営検討合同部会資料(第1章~第2章) 資料3-2:令和2年度第1回横浜市新たな劇場整備検討委員会 基本計画・管理運営検討合同部会資料(第3章)

議事内容

1 事業化に向けた検討

2 その他

【高橋部会長】

- ・ 議題に入る前に、8月24日開催の第4回管理運営検討部会及び9月23日開催の第4回基本計画検討部会の議事録について、各委員の皆様には配付させていただいております。ご承認いただきたいと思っております。両部会の議事録についてご異議ございませんでしょうか。

【委員】

(異議なし)

【高橋部会長】

- ・ 異議がないようですので、各部会の議事録については、これにて確定させていただきます。ご承認いただいた各部会の議事録については、今後、ホームページで公開させていただきます。
- ・ それでは、議題に沿って進めていきたいと思っております。なお、ご質問、ご意見については、後ほどまとめて時間を設けます。各委員からご発言いただく場合は挙手いただき、お近くにありますマイクを使ってご発言いただくようお願いいたします。
- ・ それでは、資料に沿って事務局から説明をお願いします。

【事務局】

(資料3-1の説明)

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。それでは、前回までの議論もあると思っております。まずは、今、ご説明いただきました資料3-1、第1章と第2章について、どちらからでも結構ですので、ご意見、ご質問がありましたらお願いしたいと思います。明石委員、どうぞ。

【明石委員】

- ・ もう少し後で話をした方が、座りがいいかとも思いましたが、1章と2章ということで話します。最後のところに、劇場のネットワーク化や屋外空間のことが書かれていましたが、このところは基本計画検討部会でも少し申し上げておまして、そして、

随分配慮していただいたと思います。17ページの絵がありますが、その絵を見ると丸が書いてあり、横浜美術館の前のグランモールを中心にして、みなとみらいホールと美術館、劇場が建つ場所とがつながるように書いてありますが、実際の歩行者ネットワークのパターンはそうになっていないです。少し前の14ページのところに書かれているネットワークの図面では、公園と劇場の敷地の連携は、もともと地区計画が一本、道が入っているので、それで、とちのき通りを渡っていくデッキになるかと思いますが、それだけではなく、グランモールとのつながりについてももう少ししっかりしてほしいと思います。

- ここは結構生命線かと思っています。一つは、この劇場の最寄り駅になる新高島駅はとちのき通りの下ではなく、キング軸の歩行者のデッキを作っていくところの下にあり、そこからとちのき通りという交通量の多い通りをまたいでいくことになると、そこはやはり2階部分のデッキを必要とすると思います。
- それから、特にこの場所が観光エンターテイメントゾーンというわけですけど、このような三館の連携で、美術館のあるグランモールとの連携を考えようとする、その軸はずれていて、横浜駅の方へ書いてあるわけです。ここところが、私の推測では、30年以上前からつくられてきたマスタープランの名残みたいなところがあり、もともとこの地区が旧高島ヤードという、旧国鉄のヤードが入っていたところと、それから、みなとみらい本体の埋立ての境目のようなところに当たっていて、それで何かの調整があったのかもしれないと思います。普通に平面プランを考えていくと非常に不自然なつながりになっています。
- ここがきちっとつながってこない、劇場がどうかというだけではなく、この観光エンターテイメントゾーンが生きてこないということがあると思うのです。ここに線を入れるのは、管轄としては都市整備局になるので、政策局の仕事を超えてしまい少し遠慮があるのかとも思うのですけれども、ここところを作っていくに当たって、私としては、大事な生命線だと思いますので、ご検討いただき、グランモールとのつながりということをもう少しはつきりさせてもらえたらいいかと思います。冒頭に言うような意見ではなく、申し訳ないです。

【高橋部会長】

- ありがとうございます。まちづくりで、市の部局の縦割りがあってはいけない話なので、

それはやめていただきたいと思いますが、今の意見に対して、事務局から現時点で何かありますか。

【事務局】

- ・ ありがとうございます。過去の経過はありますが、いずれにしても、みなとみらいの開発というのは、1つ当たりの街区が非常に大きな街区になっており、縦軸のキング軸や、縦方向の動線にはしっかりとしたものがあるのですが、横方向は若干弱いところがあります。
- ・ 今ご指摘の歩行者動線と、これからの時代は歩行者以外の多彩な交通手段もあり、みなとみらいの中の全体の回遊性といったことも考えなければいけないと思っています。また、最初に交通課題を入れさせていただいたのですが、やはり少し遠いエリアからそれぞれ街区の特性に応じたアクセスができるというようなことも考えていく必要があるかと思っていますので、いずれにしても、今、ご指摘のような点については、積極的に考慮させていただきたいと思っています。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。その点についてはぜひ事務局で引き続き検討をお願いしたいと思います。ほかにご意見ございますか。
- ・ では、私から1点。4ページの収支のところですけども、この表の読み方ですが、収入の試算のところ、市費の投入が14億円とあります。これは、例えば劇場という箱を作れば、当然その維持管理費が出てまいります。そういうものを全部含めて、市としての年間の必要経費、投入額が14億円という理解、全部含めてこの支出だということでしょうか。

【事務局】

- ・ 今、部会長がおっしゃったとおり、全て含めたものということでございます。上の支出の試算の表で申しますと、管理費に、維持管理費と人件費があり、18億円ということになるのですが、チケット料収入等が事業費よりも上回っておりますので、その分が18億から少し減額され、結果的に14億円になっており、全てを含んだ費用ということで捉えていただければと思います。

【高橋部会長】

- ・ 分かりました。ありがとうございます。ほかにご意見ございますか。内田委員、どうぞ。

【内田委員】

- ・ 私は、5ページのところで一つ意見を申し上げたいと思います。どうしてもこういった劇場をつくる際には、本当にやっていけるのかということに皆さんが疑問を持ち、我々はそれにしっかり答えていかなければいけないという役割になっています。今、こういった前例や、ほかの劇場の実績を確認しながら、こういった試算を出しているのですが、私がこの議論の中で言っているのは、もう今、新しい情報配信という可能性が見えてきており、今までの劇場運営というものは「座席数×公演数」で幾らというような決定的な縛りがあったわけですが、新しい配信の仕方というコンテンツとして世界中にお客さんを広げる可能性というものを秘めているわけです。
- ・ そうようなことを考えますと、この「座席数×公演数」の縛りから逃れられるという可能性をこれからの劇場というのは秘めていて、まさにここから新しい劇場をつくるとなると、そういった設備を兼ね備えるということを前提にすれば、そういうものも狙っていけるということです。この収入の部分というのはなかなか前例がないので試算ができないのが残念ですが、まだまだ可能性があるということを皆さんに分かっていただければと思っております。

【高橋部会長】

- ・ それは、つくるときにそういうことも前提として、それからあとは、毎年の運営に際してもそういう新しい技術なり手法を取り入れていけるようにという両方ですね。

【内田委員】

- ・ はい。そうです。そうすると、世界中にコンテンツ配信ということで、収益というところを狙っていけるということもあると思います。

【高橋部会長】

- ・ 多分その場合には、市の事務局の知見にも限界があると思うので、やはりそういうことに対しての民間の知恵も積極的に取り入れていただく必要があると思います。

- ・ 山中館長にお伺いしたいのですが、びわ湖ホールでは非常にユニークな取組をされたわけですが、それは、民間の知恵などを借りられたのか、それとも館としての独自の判断でそういった新しい手法を取り入れられたのでしょうか。

【山中委員】

- ・ 今回は何か事前に考えがあつてというわけではなかったです。とにかくもう公演の中止というのは避けたいという中で、無観客でやっても、子供の学芸会ではないのですから、何か目標になるものを作らなければいけないということで、ブルーレイの制作ということを最初は考えました。ブルーレイの準備をする中で、うちの職員と業者から、YouTubeでの配信も可能ですという話が上がってきて、それは面白いからやりましょうということでやりました。
- ・ ただ、私が思っていたよりも非常にいい画質で、さらに、音も良く、たくさんの方に満足して見ていただけたというのがよく分かりましたので、今後はやはりビジネスモデルにしたいと思っています。線を太くする必要があり、その工事は終わりました。はじめにやったときは業者を入れたのですが、やはり自前でやらなければこれからビジネスとしては無理だろうということで、職員も入れたり勉強させ、さらにうちは声楽アンサンブルというのがいますので、それは無料で配信して練習をさせて、そして年内には有料配信に持っていきこうと、準備を進めているところです。何か計画性があつたわけではないです。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。ぜひとも、今お話しいただいたような経験や、それから、民間の知恵をあわせて、これからつくる劇場なので、つくる時と運営について、劇場×デジタル化という新しいビジネスモデルをつくっていただきたいです。これは委員の皆さんの総意だと思いますので、そこは強く事務局に申し上げたいと思います。
- ・ 藤野委員、どうぞ。

【藤野委員】

- ・ 今のデジタル化に関連してですけれども、私も間近で、びわ湖ホールの無料配信を見て、本当に感激しました。ただ、これは逆に言うと、一期一会の奇跡だったとも言えます。

同じことは二度とは繰り返されない可能性があります。どういうことかと言うと、びわ湖ホールが20年間積み重ねてきた大変重要な様々な経験があります。高度な公演をやるだけではなく、自主企画のプロセスの中で、たくさんの育成事業をやってきましたし、ワークショップをやってきました。プロフェッショナルな団員に対するワークショップもあります。これには、東京から評論家や研究者が駆けつけ、合宿のような雰囲気、そこでみんなで燃えるわけです。こういうコアな観客や評論家、研究者がこの同時配信のときにアドリブでいろいろな支援をしてくれたわけです。配信された動画は一点画像で、字幕もついていない。『ニーベルングの指輪』の『神々の黄昏』は5時間半の作品で非常に筋も難解です。しかし、20代の若い人や初めてオペラを見た人が見通すことができたというのは、私から見たら奇跡だと思います。

- それはなぜかと言うと、SNSを使って、いろいろな研究者や評論家が同時にサポートしてくれたからです。「ここはこういう場面です」とか、「ここはこういうことを言っています」ということを同時にサポートしてくれたので、初めての人でも非常に理解しやすくなった。そういうインプロビゼーションが生まれたわけです。ということは、無観客上演に至るプロセスにおいて、20年間の中でびわ湖ホールという場所性と身体性、一回性の芸術であるということを経験している人たちがいたから成り立ったデジタルの成功なのです。
- そのため、最初からデジタルで出発したら、同じことは起きないですし、デジタルの間の競争は非常に熾烈です。例えばメトロポリタン・オペラのレベルとかベルリンフィルの配信と比べて、勝てるかということになったら、なかなか難しいです。メトロポリタンのビューイングは少し収益を上げていますが、ベルリン・フィル・メディアでも、最終的にベルリンフィルに来てもらうための仕掛けであり、採算は度外視とされています。
- だから、あまり楽観的に見ないで、実際にデジタルで成功するためには、どういう下準備をしないといけないのか、仕掛けを作らなければならないのか、というところから設計していく必要があるのかと思います。

【高橋部会長】

- ありがとうございます。デジタル化はあくまでもツールだということです。
- ほかにご意見はいかがでしょうか。本杉部会長、どうぞ。

【本杉部会長】

- 今のことに関連して、内田委員の新しい公演形態がありますということは、今回のコロナで、我々が本当に気づかされたことではないかと思います。ベルリンフィルは約10年前からやっていたけれども、2年くらい前に、たしか新しい機材を入れ替えました。両方とも機材は日本製で、前の機材はたしかソニーで、今回はパナソニックだと聞いています。
- そういう技術的なバックアップというのは、日本は非常に優れているわけですので、そういうのをぜひ技術的な面でも実現していくことが大事ですし、今のお話のように、公演形態としても考えていかなければならないと思います。
- もう一つ、先ほど切符がSからCぐらいまでという話でしたが、例えばベルリンフィルでもそうした一般の有料でやっている公演形態もありますし、デジタルで発信していく公演もありますが、同時に無料で誰でも入れる、観光客も入れるというような公演形態もあります。
- ですから、ぜひ様々な公演形態というのを、公演というのは、つまりお客さんに対するサービスというものを考えていってほしいと思います。特に今回、比較的大きな規模の席数なので、例えば新国立劇場でもZ席という席があるように切符の価格もかなり自分たちで操作できます。貸し劇場だと、それはできませんので、幅広い価格設定というのを考えてもらいたいです。
- 切符は、高い席と安い席が最初に売れるとよく言われます。当然、大規模な席数になれば、言い方はあまりよくないかもしれませんが、非常に高く売れるところとそうでないところと、どうしても物理的に出てきてしまいます。そういうものを反映して、ぜひ安い切符の提供というのを積極的に考えていってほしいですし、それから、無料で行う公演というの、この中には入っていないと思うのですが、考えていってほしいと思います。
- 私が体験した中に、例えば台湾のオペラハウスのオープニングには、前の庭を使って、外壁面にプロジェクションで、無料で見られるという公演があります。中ではオペラの公演が行われているのですが、外では市民の方が自由に見られる、ただで見られるということを行っていました。今の段階では、今日説明いただいた内容で十分いいと思うのですが、ぜひそのことも忘れずに考えていっていただければと思います。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。山中委員、どうぞ。

【山中委員】

- ・ 先ほどの高橋部会長からの運営費についてのご質問に対する回答の中で、私も確認したいのですが、維持費というか、小修繕に当たるようなものは、管理費の中に含まれているけども、市費で14億とか15億という数字、これには大規模改修などは入っていないということでしょうか。

【高橋部会長】

- ・ その点、事務局の考えを聞かせてください。

【事務局】

- ・ おっしゃるとおりでございます。通常、指定管理でも責任の分界点で、小修繕は受託者にといいことで区分されるケースが多いかと思えます。そういう考え方を取っておりますので、10年に一度などの大規模改修のような費用というのはここには含まれておりません。

【山中委員】

- ・ 分かりました。それはそれで確認したかったのです。逆に言うと、やはり最終的にこの収入支出というか、市の負担される経費を考えていく中では、大規模改修にかかる経費は非常に大きなものになってくると思えますので、それを最初から積んでおかないと、運営する側にとっては非常に、毎年の運営の中で苦しいことになりかねません。例えばPFIみたいに、30年間の大規模改修の費用がどれくらい要るから、毎年の市の支出にそれをきっちり最初から見込んでおくというようなことが必要なのではないかと思います。

【高橋部会長】

- ・ ほかにご意見ございますか。倉田委員、どうぞ。

【倉田委員】

- 先ほど事務局から建設費についての話がありましたが、おそらくこの建設費というのは、今、出ている数字もかなり大きい数字ですので、市民の関心の対象でもあると思います。実際にこれだけの規模の施設をつくらうとすると、工事費がかかることは間違いないのですが、いろいろな事例を参考にされているということと同時に、この施設の中も構造に分けて工事費を算出しており、また、現在の建設コスト、建設物価というものも参考にしながら出した数字であるという意味では、今の時点で言えば妥当な数字だろうと思います。これ以上、正確な数字というのは、もう少し設計を詰めていくということをしていないと出てこないのではないかと考えています。
- 一方で、今出ている数字はあくまでも目安であって、これから議論していくと、追加でこういったものが欲しいというような話もあると思います。それはどちらかという増額の方に働く要素でもあります。
- 機能を精査する中で、これとこれは兼ねることができるのではということを考えていけば、その結果、施設の規模も少なくなるということも考えられます。もう一つ、建設物価ということと言いますと、現在の建設物価というのは、10年ほど前に比べると非常に高い水準にとどまっています。ここ10年くらい、いろいろな公共施設の工事をやっていますけれども、施設を計画する段階で試算していた工事費に対して、多くの場合、結果として非常に高い金額が出てきて、それで不調に終わった公共工事もたくさんあるくらいです。これは予測できなかったところもあり、いわゆるオリンピック需要みたいなものがその背景にあると言われてはいますが、オリンピック需要が一段落しても、どちらかという高止まりで、あまり下がっていないという現状もあります。
- ただ、10年くらい前と比べるとかなり高い水準にあるということで、今後建設物価自体も下がることも考えられますし、これはなかなか予測できないところでもあります。そういう意味では、今後、計画を更に進める中で、工事費についてもより精査していかなければいけません。削れるところは削るとかです。
- 例えば、こういったホールでも、条例に基づいて附置義務駐車場というものが求められているわけですし、これは全てのいろいろなプロジェクトにおいてそういう附置義務が課せられているわけです。先ほど交通の話もこれから考えなければいけないという話がありましたが、みなとみらい全体での駐車場のあり方を考える中で、駐車場をシェアしていくことや駐車場の運営を一括で行うなど、余分な駐車場を作らずに済むとい

うこともありますので、そういったところでも経費の節減や工事費を少しでも落とすということは、可能性はあると思います。取りあえず一つの目安として、今の出ている数字は、少なくとも現時点での数字としては妥当だと申し上げておいてもいいのではないかと思います。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。建設物価に関しては、オリンピックがあるということで上がっており、終われば下がるという話もありますけど、一方で、上がっていたので、自治体が工事を控えていたようなところがあります。ですから、そういうものがこれからもし出てくるのであれば、あまり下がらないかもしれないです。いろいろなことを考えなくてはいけないわけですが、いずれにせよ私は、つくるときと、それから運営と、保守的に予算を組んでいただいているとは思いますが、もし増額にバイアスがかかっていくようであれば、今以上の工夫をしていただきたいと思います。駐車場などは典型的な例かと私も思います。みなとみらいの中で考えていただく必要があるのではないかと思います。
- ・ ほかにございますか。立川委員、どうぞ。

【立川委員】

- ・ 先ほどからハードウェア部分の建設費の問題、それから、長期計画の中で改修費がかかるというご指摘がありました。確かに劇場というものは使っていれば必ず傷んでいき、使えば使うほど劇場はいろいろなところに傷みが出てきます。これは当然です。ただし、そのときに、あまり当初の計画の中で過剰な設備をつくり込まない方がよいです。例えば、現在、こちらの委員会の中で何度か出てきましたが、地下部分の構造をどうするかということがあります。例えば新国立劇場のように、舞台全体が奈落部分まで沈むような施設をつくるかどうか、これについては、今の段階ではあまり深く地下工事をしない設備を考えようという方向が出ていると思います。
- ・ これはやはり、ハードウェアの改修とかメンテナンスにかかるコストも、それなりに低く抑えることができるのではないかと考えています。あと、劇場全体の規模では、新国立劇場の舞台面が4面で、今、計画されている劇場の床面積で言うと6面あるということがありましたけれども、私は単純に舞台面の面積が何面あるかということ、あまり

重要ではないのではないかと思います。

- ・ その劇場で使える空間、その空間をどのように使うかという自由度を持っていく、様々な用途に使えるような空間として考えていく方がいいのではないかと、それは劇場の施設をどう運用するかということと不可分になっていると思います。
- ・ そのときに、例えば研修的な施設として使える、または、大劇場2,500席のような大規模な客席数は要らないけれども実験的な新しい演目をやっていききたいというようなことのために、そういう施設を有機的に、多用途に使えるような空間を考えていくというのが大事なのではないかと私は思います。
- ・ 先ほどの説明の中で、横浜市が持っている劇場の規模というか、施設数や客席数が他の市と比べて多くないというリストがありましたけれども、確かにそのとおりだと思います。このようなコロナがあり、やっと今、半年かけて、再び公演活動が劇場に戻ってきています。そういうことを考えますと、やはり様々な状況にも対応できる劇場、あまり固定的な施設をつくらず、例えば観客席の設置の方法や、ロビー・ホワイエの機能などを含めて、あらゆることに柔軟に対応できる施設を考えていく、そのために運用の方法、それから、どのように管理していくかということも同時に考えていく必要があると思っています。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。
- ・ それでは、1章、2章についてはこれくらいにさせていただき、続いて、資料3-2について、事務局から説明をお願いいたします。

【事務局】

(資料3-2の説明)

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。事業化に向けた検討ということで、3-2をご説明いただきましたけれども、これについて、ご意見、ご質問をいただきたいと思います。天沼委員、どうぞ。

【天沼委員】

- ・ 劇場があることよっての効果等について、8ページ、9ページに書かれていることですが、これは必ず起こることですし、もっともなことで、正しいことだと思います。10ページの劇場設備に向けた広報の進め方、これはやはり市民の方に対してどのようなことになるかと思うのですが、今ここに来て、ふと振り返ってみますと、果たして市民と劇場についての関係がどうあるべきなのかという部分についてはまだそんなに深く議論されていないかとも思います。これからのことだとも思うのですが、今、事業の面につきましても、非常に創造的で質の高いものを作り出す、そういったものを上演していこうということも非常に大切だと思います。それに向けて、いろいろなことが周囲で起こることも非常に重要だとも思うのですが、一市民にとって、どう劇場が身近に感じるができるのか。これは先ほど本杉先生がおっしゃったように、一つの催物があったときに、お金を払って見られる方もいれば、外で放映されているものを見られる方もいて、そういった中身について触れることというのを広げていくことはできるけれども、横浜市はこれだけ人口が多いですから、例えば合唱の団体ですとかアマチュアのオペラの団体でもいいですが、プロということではなく、そういった活動されている方たちというのもたくさんいらっしゃると思います。そういった方たちにとっては、それを見ることだけではなく、非常に機能が強い劇場になる予定ですので、どう使いこなす云々は別にして、舞台に立つというような、そういった市民の劇場を舞台側から体験するというようなこともあっていいのかと私は思います。
- ・ もちろん一年の中で、どういう日程を割くとかそういう細かいことは、借りるなどいろいろあると思うのですが、市民を巻き込んだ、この劇場だからできるこそ何か、舞台で行うパフォーマンスといったものも作っていけると思いますし、やはり一方的に観客が市民ということではなく、普段そういう創造的な活動をしている人たちにとっても、これからそのようになる人もいらっしゃると思えば、何かもう少し劇場の中で市民を巻き込んで何かができることというのも考えていっていいのではないかと思います。
- ・ それが例えば、県の劇場でもなく、国の劇場でもないとする、やはり市民にとって、市の劇場で、市民に直接あるものになると思うので、それが全面的ではないとしても、つながりというものがどういったものなのかということも、一つこれから考えていく中に入れていってもいいのではないかと思います。わがまちの劇場と思える、そのように市民に思ってもらえるために何かできると思います。

- これはいいか悪いか分かりませんが、とても音響が素晴らしい劇場ができるとして、例えばよく1万人の第九というのはものすごく素晴らしい催物だと思いますけど、そういったものが劇場で行われることで、劇場の中で起こることのすばらしさみたいなものを市民が享受するという、そういう機会があると、観客だけではなく、劇場全体に対して思いができると思います。少なからず横須賀市という小さい市で、例えば第九の演奏会をやっても、毎回満席で終わるときに、何が一番いいかというのは、実は劇場自体がすごく音響もすばらしくできていて、実際、舞台にのぼる方と聞く方との特別な体験が一致するというのが、すごく大きな要素だと思っています。
- これは本当に小さな一例ですけれど、本当に可能性を秘めた劇場ができると思いますので、その辺りについても私は考えられたらと思います。

【高橋部会長】

- ありがとうございます。広報を進める上で、市民をどう巻き込んでいくかということもぜひ考えていただきたいということです。明石委員、どうぞ。

【明石委員】

- 今、天沼委員から市民と広報のことがあったので、まずそれについて申しますと、前に基本部会でも申し上げたのですが、劇場でのプランがバレエ・オペラということで、バレエを割と中心にしていこうという戦略で考えています。市民の中で、女の子がバレエかピアノか、どちらかをやっているという子は相当いらっしゃるのではないかと思います。そうすると、日本一のバレエの劇場をつくるということについて、うまく盛り立てていければ、そうしたバレエに関係している人たちはたくさんいらっしゃるの、うまく応援団になってくれると思いました。
- そのほか、財務について2点あります。1点目は当たり前のことの確認ですが、今、確かに新型コロナのことがあって、どこの自治体もものすごく苦しい状況に陥っていると思います。そうしたときに、ある意味で贅沢品かもしれないようなことを議論していることについては、いろいろ風当たりがあるとは思いますが、ただ、経済はよいときもあれば、そうでないときもありますし、財政のこともあるので、委員会としては、劇場整備ということをやった場合というのをミッションにして検討するということで受けていますので、そこは事務局の方もいろいろと大変かもしれませんが、きち

んとやり遂げるということで進めるべきではないかと思います。これは当たり前のことの確認かもしれませんが、そう思います。

- もう1点、やはり財政のことですが、私は財務の専門家ではないので、的外れのことを言っていたら、委員長あるいは内田委員からご訂正をいただければと思うのですが、今のご説明の中で、市の財政構造が個人市民税にかなり依存しているということがあり、そして、法人市民性がほかのところと比べて伸びないという構造があるということでした。
- それは横浜市の長年の課題といたしますか、東京大都市圏の中でのベッドタウンになってしまっているのです、昼夜間人口比を含めて、財政構造としてどうしても個人市民税依存のところが出てきてしまいます。今回やっていることは、市の一種のブランド価値というか、市自体のブランド化戦略をしている中で、市が文化芸術創造都市ということ掲げていて、そして、それをどのように価値として作っていくかということの中で、この議論がなされていると思います。
- 例示としていいかどうか分かりませんが、横浜と似ていると言ってはなんですけれど、神戸市がやはり港町で、大都市の近くにある街です。神戸市は、このみなどみらいというより、少し先になるかもしれませんが、ポートアイランドを作って、そのときにファッション文化都市ということ宣言して、そして、ファッションの会社をいろいろ誘致してきました。我々もよく知っているようなワコールであるとかいろいろな、あるいは宝飾品の田崎真珠であるとか、いろいろな会社が本社を置いているわけです。
- その後、震災があって、なかなか財政状況も大変になったのですけれども、医療産業都市と言いますか、そういうテーマを掲げ、それで理化学研究所の、当時は「京」というコンピュータ、最速のもので今は「富岳」というのが後継機で置かれていると思いますが、それを中心にしながら医学部の大学を誘致したりしています。今は、かなりたくさん医療産業があって、メディカルバイオクラスターとも言っています。
- そのように、その都市の戦略を掲げて、それで本社機能を誘致してきたということがあると思います。とはいえ、P & Gの本社が、アジア拠点がシンガポールに取られてしまうなど、なかなか国際競争の中では大変なようですけれども、それでも日本本社は三宮に残すようです。そういう形で、言わば本社があるということは、法人税がきちんと入ってくるわけですが、東京大都市圏にある横浜はどうしても東京に取られてしまうようなところがあります。その構造をどう変えていくかということで、横浜ならではの

のブランド価値をつかって、横浜に立地しているということ自体が、その会社にとって意味があるようなものをつくっていかうという中で、文化芸術創造都市ということ掲げてきたわけです。

- その中で、更に観光エンターテイメントゾーンということで、今、確かにインバウンドは落ち込んでいますけれども、それは一時的なもので長続きするわけではなく、グローバル化の中で人の行き来は必ずあるでしょうし、テレビを見て観光というわけにはいかないですから、そういう大事な位置づけをして、そして、そのときに何を置いたらいいのかということについて、やはりほかの都市では真似ができないようなしっかりした本物を、オーセンティシティーのある、価値のあるものをつくろうということで、今、劇場のことをやっていると思います。
- そのスタンスというのを、つまり、今この資料の中では、建設費がかかりますとか運営費がかかりますとか、その支出をどうするかということが、割と皆さんに言われるところではありますから出てきていると思うのですが、同時に横浜市全体の税金を考えたときに、この場所は確かに、埋立ての造成費としては50億円くらいかかったでしょうけど、それを民間に売って、単純に従業員が増えますというような戦略にとどまるのではなく、横浜全体の価値をどう上げていき、そして、本当に成長産業の本社が来るということのためにはどうするか、あるいは一流の観光という、非常にクオリティの高い観光都市となるにはどうしたらいいか、その視点が入っているということを忘れないで皆さんにお伝えしていくということが大事かと思います。

【高橋部会長】

- ありがとうございます。本杉部会長、どうぞ。

【本杉部会長】

- 私は、大きく言うと2つの点について話したいと思います。1つは建設で、オープンまでにかかること、そして2つ目がオープンしてから継続的にかかってくることにについてです。特に費用のことですけれども、オープンするまで建設にかかるお金というのは、一般的には非常に突出して、そのときだけにかかってくるわけです。ですから、いつその事業に取りかかるのか、そして、その事業に取りかかった後の工事期間中にどのようにお金がかかっていくのか、そのことを考えますと、やはり時期というのは、横浜市が

抱えているほかの様々な施設がありますので、その優先度は当然考えて取り組むことになると思います。

- 先ほどの説明の中でも、文化施設としては非常に大きなお金になるのですけれども、市全体の施設として見ると実現可能な範囲ですという話です。ですから、まずはその時期をほかの施設に配慮しながら見極めていくという丁寧な取組をしていく必要があるというのが1点目の1つです。
- また、建設工事は一般的に突出してお金がかかりますので、様々なインフラ整備を横浜市もされている中で、平準化をして、負荷が一遍にかからないような予算の作り方、事業の取組をやられているのではないかと思います。
- ですから、ぜひこの計画にもそういった視点で、事業費が一遍に負荷となってかからないような、できるだけ平準化していくような、そういう仕組みを考えていただきたいというのが1点目の2つ目で、それらがまず建築に関わってくるところです。
- もう一点は、継続的にかかってくるお金のことです。特に運営費というのは、山中館長が日々苦勞されているかと思えますけれども、事業をすればするだけかかってくるわけで、もちろんそれに見合う成果があるからやられているわけですし、そのためにこの施設もあるわけです。そこを単純に削る、小さくすればいいという話ではないと思います。効果に対してどのぐらい投資していくかということを考えていくことになり、その資料を今日も出していただきました。オープン当初は皆さん熱があって、市民の方たちも自分たちの誇りになるものができたと言って喜んでくださる方も多いと思いますが、やはり月日がたつとだんだんとそれが重荷になっていくというようなこともあったりします。ですから、継続的にかかってくる費用に対する、特に運営にかかってくる費用についてはしっかりと展望を持って取り組んでほしいと思います。継続的な費用に対する配慮の1点目です。
- もう一つは、先ほど山中委員からも話がありましたけれども、オープン後建物はだんだんと傷んできますので、それを維持するためには修繕をしていかなければなりません。何年かに一遍、10年とか20年後には、ある程度の規模の改修というものが必要になってきます。特に建築の設備関係ですとか、機械関係ですとか、舞台の設備もそういうことが必要になってきます。それを見込んでおくということが大事かと思っていますので、そういうことを念頭に入れて、長期的な展望で、仕組みを作っていくしてほしいと思います。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。水野谷委員、どうぞ。

【水野谷委員】

- ・ 私は、参考にあります運営費の他都市との比較ということのページについてお話ししたいと思います。この中にあります運営費の事業収入の割合は大変大きくなっていますが、これはいい公演を作って、そして売っていくという、そういう覚悟が必要だと思います。いい舞台、いい公演というのは、要するに、売れる公演ということになります。そこで一番大事なのはソフトでもあります。ですけれども、その公演をどの劇場でやるかということは非常に集客に影響する大きなポイントになりますので、仮に2か所の劇場で同じ公演を行う場合、チケットの売上げの差というのは歴然と出るのが現状です。ですから、お客様は、こちらの劇場で見る方がいいというように選ばれることになりますので、どんな劇場にするべきか、これはこれまでもずっと議論を重ねてきましたけれども、とにかくいい劇場だとお客様に感じてもらえるものにしないと、これからの劇場としては成り立っていかないのではないかと思います。
- ・ 集客力を持つホールというのは、貸館の稼働にもつながりますので、事業収益に直結する、非常にシンプルな構造になります。6ページのこのプログラム設定で考えられている3つのケース、このプロセスは全くそのとおりだと感じました。
- ・ 続いて、8ページの事業効果の中で、「地域文化の振興」で触れられている「高い創造力や他人を思いやる気持ちの醸成」という部分がありますけれども、今、コロナ禍の中にあって、現代の人たちの価値観が大きく変化することが予測されています。「他人を思いやる気持ち」は人としての基本であって、不変でなければならないものです。心は感動したり、それから、夢を持ったりしながら長い時間をかけて育まれていきますから、まさにこの事業も次世代を見据えた、そんな長期スパンで検討されていくことが重要かと思いました。
- ・ 先ほど天沼委員からもございましたが、市民を巻き込んでいくということ、それはやはり長い時間をかけないとなかなかホールの応援団、劇場の応援団みたいなものにはなっていないので、ぜひ腰を据えた、そういう運営がなされると、市民とのすばらしい横浜市の劇場というものが実現できるのではないかという期待を感じます。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。藤野委員、どうぞ。

【藤野委員】

- ・ まず一つは、基本理念の確認を毎回させていただいているのですが、芸術文化に関わる政策というのは、一方では、市民文化政策の面があると思います。天沼委員や水野谷委員が言われたような市民文化政策という面があり、もう一つは、都市文化政策、都市戦略、これはもうグローバルな戦略となってきます。この両面が必ずしも有機的につながらずに、分離してしまうことが多いです。一般的に基礎自治体の場合は、市民文化政策寄りであればいいかと思います。大都市、大きな政令都市の場合は、都市文化政策中心でやったらいいと分離することが多いのですが、私は、この両者を分離させない、有機的につながる仕組みをこの新しい劇場で実現できたらすてきだと思っています。
- ・ どういうことかという、まず市民文化政策寄りの話で言えば、私はやはり芸術文化というのは、都市や社会をより人間的なものにする、そのためのメディアであり、アイテムだと思います。都市やその地域をより人間的なものにするという、非常に抽象的な言い方をしていますが、私たちは常に共感を持ったり、違和感を持ったりして暮らしています。まちに対する違和感もあったり、人に対する違和感もあったり、芸術だって好みがありますから、共感や違和感があります。今、SNSの中で、その違和感や共感が完全に二分化されているわけです。好き、嫌い、いいねで行く、嫌いで行くわけです。そのため、炎上してしまうということが起きています。その両者の間にコミュニケーション、対話が成り立たないというのが今、大きな問題だと思います。
- ・ ですから、芸術作品を通して、共感を持つにしても、違和感を持つにしても、その両者を分け隔てるのではなく、共感と違和感を重ね合わせる、対話したり議論することによって、多様な市民の相互理解を深めていくような場や、機会、時間というのをまちの中に埋め込む、染み込ませていく、こういった仕掛けとして劇場というのは非常に重要だと思っています。
- ・ つまり、共生社会を実現するための非常に重要な、現代的なアイテムとかツールが劇場だと、あるいは舞台芸術だと私は思っています。これはどちらかという、市民文化政策寄りの考え方ですが、もう少し現実的に考えていくと、この18億円の鑑賞事業

を本当にキープできるかどうか、市費を入れないでできるかどうかというのはかなり勝負になってきます。ここは結構シビアに考えていかななくてはいけないと思っています。

- これはちょっと空気の読めない発言になってしまうかもしれませんが、例えばIRのようなものよりも、はるかに劇場というのは人間的なプロジェクトだと私は思っています。つまり、ずっと品格があり、これは横浜のようなまちにはふさわしい、本当にすてきなプロジェクトだと思っています。
- 私は、戦後の行政がお金がない時期、経済的に貧しい時期に、何で公共ギャンブルというものが公的に認められたのかを調べたことがあります。当時はやはりやむを得なかった面があるわけです。人間の射幸心、幸福を射止めようという気持ちを、言わば利用して、財政を潤わせていく、でも、それはやはり当時としてはしようがなかったことです。そのこと自体、それが教育とか社会福祉費に回ったという面もあります。
- ただ、社会がまだ十分に成熟していない段階の場合には、そういった公共ギャンブルあるいは人間の射幸心というものを利用することは必要悪としては許容されたと思うのですけれども、つまり、富の配分とか再配分がまだ十分に機能してない国や社会では、これはしようがなかったと思うのです。けれども、民主主義的な考え方や行動が十分に根づいた、成熟した社会にとっては、公営ギャンブルのようなものというのは、僕は必要悪ではなく、害悪でさえあるというのが私の主張です。もしかしたらいろいろなご意見の方があると思います。

＊補記：公営ギャンブルに関する発言の中で関係者の人権への配慮を欠く表現があったことに対し、藤野委員からお詫びの言葉がありましたので、補記します。

- けれども、今の資本主義のシステムを急激に変えることができない限りは、どうにかして富の再配分のための戦略ということを考えなくてはいけないと思うのです。
- そのときに、現に世界中の富裕層というのは、アジアでもどんどん増えてきています。だから、そういった富裕層をターゲットとして劇場運営をする、充実した演目をかけていく、それからフェスティバルなどを仕掛けていくということが非常に重要だと思います。これは、1の投資に対して、3から5の経済波及効果があるというのは、いろいろなデータでもはっきりしています。
- ですから、すごく実利的な言い方をすれば、「稼げるところから稼げばいい」と、そし

て、稼いだものを、先ほどの市民文化政策と申し上げたけれども、市民社会に還元していく、例えば芸術文化教育であるとか、社会包摂に活用するというような循環がつくれたらいいと思います。

- このポストコロナでもう一度確認しなくてはいけないのは、インバウンド観光客というものをきっちり取り戻していくということになると思うので、インバウンド観光に結びつける戦略を強化するということが成功の鍵です。この鑑賞事業18億円は日本の富裕層だけでは、今後はなかなか厳しくなってくるだろうと思います。
- その意味でも、8ページにあった観光客の誘致とか効果の把握で、消費効果、それから、経済波及効果を数字と理念の両方で、定性と定量の両方でしっかり出して、説明していき、そして、鑑賞事業はなるべく公費を入れないで18億円をきっちりキープするというのを、かなり肝に銘じた方がいいのではないかと思います。

【高橋部会長】

- ありがとうございます。IRが公営ギャンブルかどうか、私には分かりません。公営ギャンブルというのは、そこで得た収入を、一部は入っておりますし、一部はインフラ作りとかに回すという話です。でも、今のIRは、私はそこで儲けようとは思っていないのではないかと思いますので、そういう意味では、公営ギャンブルと一緒に話しさせていいかどうか分かりませんが、ご趣旨はすごく分かります。
- 私も意見を言わせていただくと、今、藤野委員がおっしゃったことと、先ほど明石委員がおっしゃったことは、言葉は違いますが同じかと感じております。それで、横浜市の収入構造、支出構造を見てみると、確かに個人依存であり、したがって、長年、企業を育てたいと思ってきたわけですけど、ただ、コロナで実は企業収益はものすごく悪化していますから、ある意味では、横浜はラッキーだったと言えないことはないと思います。
- ただ、長い目で見ると、やはり個人依存であるから、長期の財政収支を見ると高齢化とともに市の財政は悪化していくということだと思います。したがって、どうやって横浜市の財政を支えていくかという金銭面、歳出歳入ということで考えると、先ほど明石委員がおっしゃったように、一つはやはり企業から入ってくるお金を増やすこと、そのためには文化芸術とかエンターテインメントを通じて新しい事業が生まれ、儲けて、法人税を納めてもらうという構造をいかにつくるかということです。
- もう一つは、今、藤野委員がおっしゃいましたけれども、市の中にお金が足りない部分

は外から持ってくることです。外から持ってくる最大の手段がインバウンドであり、観劇であり、観光であり、横浜市の外、日本国民でもいいですし、インバウンドでもいいと思いますけれども、そういう人たちに横浜にお金を持ってきてもらう、この2つの戦略で、歳入をこれから長期にわたって支えていく、劇場整備というのはそのための投資だということです。これを言い換えると、藤野委員がおっしゃったように、市民文化政策と都市戦略と、これをうまく融合させるということが、まさにそのキーポイントだと私は理解しております。まさにお二方がおっしゃったことは、違う言葉ですけど、まさに今回のプロジェクトの意義というのをすごく端的に言い当てていらっしゃるかと思います。

- もうそこで尽きているようにも思いますけど、ただ、あえて申し上げますと、私も財政をかじっていますので、まず施設をつくることについての480億円の負担については、これからの横浜市の財政を考えたときに決して小さい負担ではないと思います。しかしながら、施設整備費が2,000億円あり、この中で市民のための様々な、道路や公園、学校施設などのためのお金を削ってはいけないわけで、削らなくても、この費用が捻出できるかどうかというところがポイントだと思います。そこは建設費をうまくならしていったって、あるいは場合によっては市債も使いながらやることで、義務的な支出、不可欠な支出を削らなくてもやっていけるのかと感じました。
- それから、運営費についても、インパクトは確かに小さくないわけですけども、行政運営費という2,700億円の中で吸収できない話ではないと思うので、ここも小さくはないですけども、支出として無理な話ではないと思います。したがって、やはりこの運営費で言えば14億円、あるいは建設費であれば480億円、これを投資と考えて、将来の収入にどうやって結びつけていくのかという、まさにその効果をきちっと詰めていくというところがこれからの課題だろうと改めて感じた次第でございます。
- ほかにご意見いかがですか。内田委員、どうぞ。

【内田委員】

- 出尽くした感はあるのですが、補足したいところがあります。今回はしっかり財政の数字が出てきたというところは見どころで、これはもう様々な方が、世の中の的にポジショントークをしたがる中で、財政の数字というのは圧倒的なファクトです。もうこの数字は泣いても笑っても、ここに一つのファクトがあるという、これを受け入れな

ればいけないという日本の現実があり、横浜市の現実があるということです。

- こういう数字はいろいろな使いようというところもあって、このような状況で、今、乾いた雑巾を絞って何とか捻出しているのだと、みなとみらいも土地も売り尽くしてしまっ、ここからどのような税収が見込めるのかといったような、こんな劇場なんかつくってどうするという議論が一方であるわけです。そういうことですけれども、だからこそというところでは、だからこそ、やらなければいけない、このまま何もしないで、横浜のこの現実を見れば、人口減少は確実に起こるし、市の税収は絶対に減っていくし、もうこのままですということなわけです。
- では、ここに何か抗っていかなければいけない、何もしないわけにはいかないという中で、文化、観光というところが出てきます。みなとみらいも一生懸命、本社機能を誘致しようと思って頑張ってきたけれども、本当に本社というものを持ってきてくれたのは日産や幾つかだけで、そうなりません。そういう中で、研究開発というところにシフトして、今、研究開発の拠点になりつつあるということであるけれども、当初の目的、目標とは大きく違ってきているという現実がある中で、では、ここから横浜市が本当にプレゼンスを上げていく中でどうするかというと、やはり日本の歴史というか、まちの歴史というのは、まず人が集まると、必然的に何か人が集まる、人が集まればそこにお金が集まる、そのお金が集まるとそこに文化が集まる、人が集まるところに金が集まり、金が集まるところに文化ができると、こういうようなものが起こってくるわけです。そういう中で、では、横浜はここからどうするというときに、文化というものを、ほかに何をやるんだというぐらい文化をやるというところが、必然的になってくるのだらうと私は思っています。
- では、お金をどうするということですが、こういう市の財政のところだけを見ると、非常にネガティブな、視野が狭くなってくるというところがあります。これはファクトとして受け止めることは非常に重要で、みんなが共有しなければいけない数字です。けれども、一旦、外を見れば、今、世界の人口は77億人で、それが2030年には85億人になり、2050年、30年後には97億人になるのです。これはすごいことです。あと30年で、20億人増えるのです。でも、日本はどんどん人口減少するとなると、どうしても目線が下に向いてきます。世界では20億人、人口が増えてくるという中で、今、日本政府がインバウンドとして4,000万人を目標とする気持ちもよく分かりますし、そこなのだと思います。そこからお金を持ってきてもらい、お金を落としてもらうことで、日本を支えていくと

いうことだろうということです。

- では、横浜にどうやったらそういった人たちに来てもらえるか、すごいね、横浜、行かなきゃと言って、世界中の人が来て、お金を落として、滞在して、ステイ横浜をしてとなるのかということ、本当に真剣に考えなければいけない段階に来ているわけです。その中で、グローバル都市であるとかSDGs都市宣言であるとか、文化観光都市という中で、ほかに何を作ればこうなるのだろうというくらい、劇場というものは可能性はあるわけです。しかも、バレエというのは非言語という意味において、世界中の人たちがすごくダイバーシティというものを一番実現しやすい演目でもあります。踊りであるため、そういう意味において、今、皆さんと一緒に議論してきていることというのは非常に悪くないところにきていると私は思っています。
- 劇場をつくることによって、人がすごく集まり横浜が潤う、芸術というものから非常に答えのない課題に対して、いろいろなイマジネーションを發揮して地域の問題解決をしていく、課題解決をしていくという人材が必要だというときに、人材をつくっていくまちでもあるということで、その効果というものも示していかなければいけません。また、本当に経済効果はどれくらいあるのか、人材を輩出できるのであれば、それはどうということなのかということをお我々は示せていないわけです。ですので、そこは課題としてしっかりと示して行って、皆さんに納得してもらい、この新しい劇場を横浜につくることはこんなにいいことだと共有していくことが、ここからのこの会議の課題になるのかと思っています。
- あと、バレエという意味においては、先ほど明石委員がおっしゃったように、世界の中で、日本が一番バレエ教室がある国です。小さい頃にバレエを習うという意味では、一番バレエ生徒人口が多い国でもあります。でも、その人たちが世界的に羽ばたいているかということ、パッと皆さんがバレエダンサーで名前が思い浮かぶ人は誰でしょうか。熊川哲也さんと吉田都さんと、あとは誰かといったくらいではないでしょうか。これは全然高みに行っていないわけです。ですので、劇場をつくるときに、市民に寄り添って、そこが応援団になってというのはよく分かるのですが、本当にトップクラスのものを示しながらやらないと、高みにはいかないと思います。今までだっただけでずっとそうだったわけです。
- だから、いかに市民に寄り添いつつ、でも、世界的にトップクラスのダンサーが、多様な国やアジア全体から集まってきてそれを目指して頑張ることによって、非常に裾野

の広いバレエの子供たちがここに行ったり、ここに行けなくても、みなとみらいを中心とした企業たちにそういうクリエイティビティーを発揮して、エンターテインメントを集約してくるようなまちになっていくと思います。それにより、横浜に行けばそういうクリエイティビティーの人材がいっぱいいるから横浜に出ようという企業がどんどん出てきますし、そういうような効果にまでつなげられるというのは、やはりある程度とんがった劇場かと思います。市民にも親しみを持たれるけれども、でも、敷居が高く、ものすごい最高峰なのは少し近づきがたいといった世界も同時に併せ持つ、ここがすごく難しい課題で、何でもみんなが使えるとなったときの骨抜きになって、何かみんなが自由にフレキシビリティでやって使える劇場だけでも、でも、何にも特化していないというようになるのも一番残念な結果になるので、そこの微妙な兼ね合いというのはよく考えていく必要があると思います。どこを目指すのかというのは、いま一度ゴールセッティングをして話し合っていくということが大事になってくるかと思っています。

【高橋部会長】

- ありがとうございます。倉田委員、どうぞ。

【倉田委員】

- 今までほかの委員の方がおっしゃったことと少し重なるかもしれませんが、私自身、今日も横浜市の財政事情を見て、その上で、480億という支出はそれなりに、そんなに小さいものではないという理解をします。そういう意味で、やはりこのプロジェクトを実現するためには、市民の理解なくしてはなかなか難しいというところがあるのではないかと感じています。
- そういう中で、では、市民に対してどういう説明をすれば、市民の理解が得られるかということだと思うのですが、一つは、この8ページにもあるような、やはりこれが単に施設、ホールをつくる、劇場をつくるというだけではなく、こういった事業効果があるということだと思います。先ほども話がいろいろ出てきましたが、やはりブランド力というものを上げることで、特に海外を見ていると、企業の立地の選考理由というのがあり、そういう中で一つは大学があるとかそういった一流の教育機関があるというものもあったりするのですが、文化的な環境というのもその中に含まれています。それは企業にとってもですが、そこに働く従業員にとってもそういうものが重要だと理解してい

るところもあるわけです。

- そういう意味で、私自身は、市民に対して戦略的に理解を求めていくようなことをやらないといけないかと思っています。先ほどから話があったように、多分行政がいきなり市民にバーンと投げて、そこはなかなか理解できないだろうと感じます。特にバレエやオペラというのは非常に敷居の高い芸術だと一般の市民は感じておられると思うのです。そういう方たちにいきなりこういった情報を投げて、ほとんど理解されないと思うので、そういう意味で、先ほども話がありましたように、やはり日本では、特に女の子の習い事として、ピアノやバレエというのはあるわけです。そういう意味で、横浜市は潜在的にそういうことをやっておられる市民がかなりいるだろうと思います。そういう方たちを積極的に、今回のプロジェクトを支援する市民をどんどん巻き込んでいく、そういう戦略は必要かと思います。そういう人たちが、同じ市民の中で、関心のない市民の人たちに少しでもそういう働きかけをしてもらうことで、そういう可能性が随分増してきます。特にこういう財政状況の中で、いきなり行政が投げかけてもなかなか理解を得られるというのは難しいのではないかという気がします。
- そのときに私自身は、今、たまたまですけれども、コロナ禍の中でライフスタイルとかワークスタイルということが見直され、あるいはそこにみんなの関心があるわけです。そういう意味で、横浜市はそういう中で、新しい時代、ライフスタイルを議論するときにはかなり不可欠な資源を持っている、環境を持っているということを、みんなが理解する必要があるのではないかという気がしています。
- 私は都市を専門にすることもあり、いろいろな形でインフラという言葉を使うのですが、私自身はこういった文化施設も、そういう意味では、これからの都市における暮らしのインフラではないかと思っていて、そういう意味では、インフラというのは短期的なものではないわけですから、そういうところに投資することの意味を少しでも分かりやすく理解してもらうことが必要かと思っています。
- そのような意味で事業効果というところがあり、これは都市のレベルでこういう効果がありますということを言っていますけれども、やはり一部でもいいから、市民にとってどういうメリットがあるのか、プラスがあるのかということを謳うということが必要かと思います。少なくとも市民の理解を得られない中で、この事業を前に進めることは本当に難しいと思うので、もちろん、先ほど内田委員から話があったように、最終的にはこの施設がもう少し上のレベルの文化的ないろいろな活動の場になっていく、そ

ういうことは大事ですけど、取りあえず、やはり市民の理解を得ることが非常に大事だと思うので、そういう意味で少し、そういった広報は非常に大事ではないかという気がします。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。山中委員、どうぞ。

【山中委員】

- ・ 劇場の比較でびわ湖ホールが出てきますが、自治体としては東京都とか大阪市と比較が出てくるのですが、滋賀県というのはいないです。滋賀県というのは、県ですけど、人口は140万人ほどで、本社のあるような企業はほとんどなく、それで一般会計は5,000億円くらいです。その中で、なぜ比較していただけるような劇場を建てているかという、やはり劇場というのは学校や病院と同じように必要だと思っているからです。つい先日も横浜市の小学校に、うちの声楽アンサンブルが歌いに行きました。みんな感激してくれたということでした。これは文化庁からのお金で行っていますが、県内では満遍なく県内の小学校へ巡回のオペラや合唱、いろいろな公演を行っています。やはりそういうことが必要だと思っていますし、滋賀県から見たら横浜市の財政は羨ましい限りです。工夫次第だと思います。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。時間も過ぎていきますので、この辺で取りまとめに入らせていただきたいと思います。
- ・ 本日は、事業化などに向けて様々なご意見をいただき、ありがとうございました。本日の議論を踏まえ、次回に向けて、事業効果の算出、まちづくりの視点、市費の戦略的投資、この3つについて更に深掘りした検討が必要だと思いますので、事務局で作業を進めていただきたいと思います。
- ・ また、最終の検討委員会では提言をまとめることとなりますが、この合同部会では提言に向けた骨子案を取りまとめることになると思います。そこで、提言のポイントは3つあると思います。昨年度の検討委員会で、新たな劇場整備を推進すべきとの提言を受けて、今年度は、ポストコロナにおける劇場整備のあり方を両部会で議論してきました。

様々なご議論、ご意見をいただき、ポストコロナにおいても、新たな劇場の整備を着実に進めていくということが一つのポイントでございます。

- それから、2つ目は、昨年からの課題である事業計画の見直しを作成するに当たり、厳しい財政情勢下にあるという共通認識の下において、まず劇場がもたらす高い事業効果が存分に発揮されるよう、整備や運営をしっかりと進めていくべきというご意見がありました。一方で、市全体の優先順位から事業着手の時期を丁寧に判断すべきというご意見もいただきました。提言に向けて、事務局で検討をお願いしたいと思います。
- 3つ目、これは非常にこれから重要だと思いますが、劇場整備の必要性や事業効果について、市民の方々にきちっと説明し、今日の言い方で申し上げれば、市民を巻き込んでということだと思いますが、市民の理解をいただくことが大変大事であるということだと思います。
- この3点を踏まえて、提言の骨子案を作成していくため、事務局は引き続き作業を進めていただきたいと思います。
- 以上を私からの今日の取りまとめとしたいと思います。委員の皆様いかがでしょうか。その他、全体を通じて何かご意見ございますか。ないようでしたら、進行を事務局に戻したいと思います。

【事務局】

- 予定の時間を超えてのご審議、誠にありがとうございました。
- 次回の日程につきましては、今後調整させていただき、改めてご連絡させていただきますので、よろしく願いいたします。
- それでは、以上をもちまして、横浜市新たな劇場整備検討委員会基本計画検討部会・管理運営検討部会の第1回合同部会を終了いたします。ありがとうございました。